

蓬 左

HÔSA



金城温古録
(8頁参照)

蓬左文庫典籍研究会の発足

研究会発足の経緯

名古屋市蓬左文庫には駿河御譲本や初代尾張藩主義直の蔵書をはじめとして、学術的・文化的に価値が高い典籍が多数所蔵されている。筆者が専門とする日本古代史では、『続日本紀』（鎌倉時代後期写・国指定重要文化財）と『侍中群要』（嘉元四年〔一三〇六〕写・国指定重要文化財）がとりわけ著名である。この二点は、共に現存最古の古写本としてその史料価値が極めて高く、従来から注目され、本格的な調査がなされてきた。

しかしながら、蓬左文庫所蔵典籍（以下、蓬左本）全体に目を向けると、いまだ詳細な調査がされていない典籍が多数あることに気付く。例えば、蓬左本には、先述した駿河御譲本や義直の蔵書のほか、江戸時代の尾張で活躍した古代史学者の編纂物や蔵書類も含まれており、歴史研究や歴史学そのものの発展過程を知る上で無視できないものが多くある。したがって、蓬左文庫の本格的で詳細な総合調査を行い、蓬左本を研究に活用させるための土台を整える必要がある。

このような認識のもと、平成二十九年三月、名古屋近辺在住の古代史研究者のうち吉田一

彦氏（名古屋市立大学教授）・丸山裕美子氏（愛知県立大学教授）・廣瀬憲雄氏（愛知大学准教授）、さらに若手研究者である浅岡悦子氏（名古屋市立大学研究員）・筆者と、蓬左文庫の職員である鳥居和之氏（文庫長）・木村慎平氏（学芸員）によって、蓬左文庫の学術調査について意見交換を行った。その結果、古代史関係のものから順次調査を行い、調査成果を蓬左文庫HP蔵書検索のデータベースに反映させ、その内容・質を充実・向上させること、また、一般向け講座を開いて調査成果を社会に還元することを目的に、共同研究を開始することが決まった。その研究チームとして発足したのが「蓬左文庫典籍研究会」である。

研究会の調査活動

本研究会は、四月十五日（土）の第一回目を皮切りに、一か月に一度程度のペースで原本調査を重ねている。調査に当たっては、「あ」基礎情報（編著者、書写者、奥書寸法、紙数など）の記録・整理、「い」写本系統の分析、関係諸写本との比較（写本系統の位置づけ）の二点に重点を置いている。

そのような中、平成二十九年十月、幸いにも、平成二十九年年度の大幸財団法人文・社会科学系学術研究助成に採択された。今後は、この研究助成金を使用して、蓬左本と関係する諸写本の実

見調査を精力的に行っていく予定である。

というのも、これまでの調査で、すでに他の文庫や機関が所蔵する写本との比較・検討が必要な蓬左本がいくつか見つかっており、関係写本の実見調査をする必要が出てきたからである。

ここではその一例として『日本書紀』（請求番号一〇五・四四）を紹介したい。

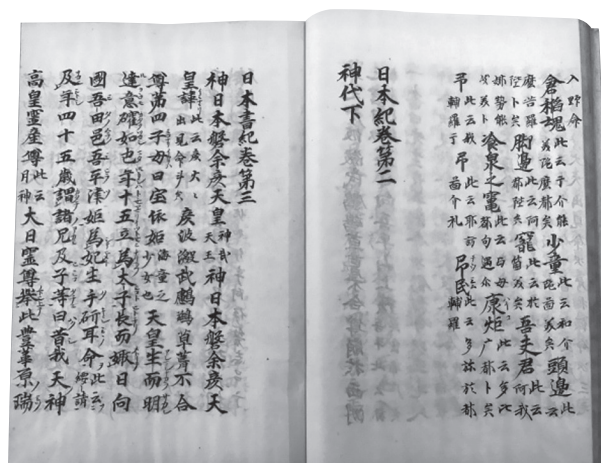


研究会メンバーによる調査風景

『日本書紀』附訓と玉屋本

蓬左文庫は複数の『日本書紀』を所蔵しているが、この本は巻一から巻十までが三冊の冊子本で残されている。同書は訓注が附いている

から、便宜的に『日本書紀』附訓と称することにする。



『日本書紀』附訓、卷二末から卷三冒頭

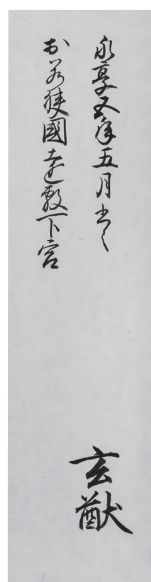
まず奥書を見てみると、巻一・四・七・十に「良海（花押）」という署名がある。この良海は、玉屋本（東京国立博物館蔵）と通称される『日本書紀』の書写者である。そこで、東京国立博物館HP上で公開されている玉屋本のデジタル写真（巻二末から巻三冒頭）を見てみると、『日本書紀』附訓と字配りが同じであり、さらに筆跡も酷似している。また、日本書紀撰進千二百年紀年会編『撰進千二百年紀年 日本書

紀古本集影』（一九二〇年）によって玉屋本の奥書を確認すると、『日本書紀』附訓と同文であることが判明した。

次に、相違点を探してみると、巻五が注目される。『日本書紀』附訓の巻五署名は「玄猷」とあるが、玉屋本では、「良海（花押）」を抹消してその上から「玄猷」と書かれているらしい。同様の点は、巻三の内題の「日本書紀卷第三」とある箇所でも指摘できる。これらは両者の関係を考える上で重要な相違点だと考えている。

以上のように、『日本書紀』附訓は玉屋本との関係が極めて濃いものであった。ところで、良海が書写した『日本書紀』は他にも残っている。それは三嶋本と称されるものであり、これも『日本書紀』附訓との関係が濃い写本だと推定される。したがって、今後は玉屋本と三嶋本の実見調査を実施しようと考えている。

『日本書紀』附訓、巻五奥書



名古屋古代史研究会との合同研究会

以上のような研究会の活動と調査の途中経過を広く共有するため、平成二十九年十一月

五日（日）、名古屋古代史研究会と本研究会の合同研究会が蓬左文庫で行われた。最初に『続日本紀』巻十二と『宇多紀略』の見学会があり、その後、本研究会メンバーによる発表が三本あった。当日は十七名の参加者があり、活発な議論や有意義な意見交換を行うことができた。



研究会の様子

本研究会が発足して間もないうちにこうした研究会を開くことができ、さらにそれが盛況であったことはうれしい限りである。本研究会の活動はまだまだ始まったばかりであるが、今後も皆さんに成果をお伝えできるよう、着実に活動を重ねていきたい。

（名古屋市立大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員DC2 手嶋大侑）

企画展

奇才、我が道をゆく―達磨・布袋・一休―

本展で取りあげる「奇才」とは、真理を求め、決して奇を衒うのではなく、世間の常識を超える言動をとった者たちを指します。東アジアにおける奇才の起源は、古代の中国に求めることができます。道教の経典『莊子』の中で、孔子(前五五二―前四七九)は「風変わりな人とは、俗世間の人とは違って、天に似ているのだ」と述べ、奇才を忌避ではなく憧憬の対象として評価しています。当時すでに、不老不死で空中を自由に飛び回る仙人の存在を信じる神仙思想が流行し、神仙たちの人智を超越した言動の伝説が処々で語られていました。後漢時代(二五―二二五)末期の政治的混乱の中では、政治的権力から身を引き山野に暮らし理想を追求した、許由・巢父に代表される隠士が、生き方の手本とされました。また、唐時代(六一八―九〇七)からは、仏教本来の常軌から逸した行動を悟りの境地の顕われとして肯定的に評価する動きが禪宗を中心に高まり、布袋や寒山・拾得が風狂の僧として人気を博しました。

絵画や工芸品の意匠として好まれた奇才たちは、後世秀でた偉大な人物には顔や体には常人と異なる特徴があるという考えから、絵画や工芸品の中でその象徴ともいえる奇妙な姿で登場します。本展では、中国の奇才のみならず、菅原道真や一休などの日本の奇才も加え、様々な奇才たちの姿と物語をお愉しみいただくとともに、お正月に合わせて、布袋を含む七福神にまつわる作品もご紹介いたします。



(上：全体、下：部分)

堆朱楼閣群仙図盆

銘「大明嘉靖年製」
中国・明時代 16世紀

官営工房で皇帝のために作られたと考えられる盆で、宮殿の周りに集う仙人たちがあらわされています。鶴や鳳凰に乗って飛来し、海上に浮かぶ様子は、その高い神通力を表現しています。



布袋図

狩野元信筆 室町時代 16世紀

布袋は、唐時代末に実在した僧です。雪中に身を臥せても体が濡れなかったり、人々の吉凶を言い当てたり、と奇妙がられていましたが、末期に自身が弥勒菩薩の化身であると語りました。禪の好画題であり、古くから最も人気のある奇才です。



許由巢父図(部分) 呉偉筆 中国・明時代 15世紀

帝堯から天子の位を勧められるも固辞し、汚い話を聞いたとして潁川の水で耳を洗った許由と、そこへ牛に水を与えるために通るかかり、許由の耳を洗う理由を聞くと、汚れた水を牛に飲ませるわけにはいかないとその場を去った巢父を題材にしています。

企画展

ひなを楽しむ

雛まつりは古代中国において、三月の最初の巳の日に、水辺に出て穢れや災いを祓う行事が起源と考えられています。七世紀頃には日本に伝来し、平安時代には上巳の節供として三月三日に行われるようになりました。それがいつのころからか、人形に自分の罪や穢れを託して川に流す風習などと相まって、今日の雛まつりの行事が形成されていきました。

江戸時代中頃、雛まつりは庶民にも浸透し、「享保雛」「古今雛」などの雛人形や添え人形・調度類をあつらえる富裕層も現れました。町なかを彩ったこれらの雛飾りは、大名家の雛とは趣きが異なり、大型かつ豪華でありながら、人形の表情には素朴で身近な親しみやすさも感じられます。

これらの雛飾りのなかでも、ひととき華やかなのが御殿雛飾りでした。京都御所の紫宸殿をモデルに作られた御殿をとまなう雛飾りで、江戸時代末期に京都・大坂で流行し、明治時代以降も関西圏で人気がありました。また、戦前から戦後にかけては中部・東海地方が御殿雛の一大産地となりま



御殿雛飾り

明治時代 19世紀 志村正氏・恵子氏寄贈

した。

本年は、京都で造り酒屋を営んできた志村家より平成二十四年(二〇二二)に徳川美術館に寄贈された御殿雛飾りをご紹介します。男雛・女雛に加え、三人官女・隨身などの人形や様々な道具類がとまらない、大型の御殿も細部にまでこだわった本格的な作りをみせる、明治時代の京都の旧家にふさわしい御殿雛飾りです。このほか初公開の品々とともに、江戸時代から昭和にいたる様々なお雛さまをご紹介します。



【初公開】御殿雛飾り

明治～昭和時代 20世紀 小見山家・柴田家寄贈
京都の旧家より寄贈を受けた雛飾りです。男雛・女雛・三人官女・御殿などは明治40年(1907)、五人囃子・灯台などは昭和3年(1928)、それぞれ母と娘の初節供にあつたえられました。



内裏雛飾り

昭和13年(1938) 越智恵津子氏寄贈

男雛・女雛・三人官女・隨身・仕丁の人形に加え、犬張り子や几帳・灯台、そのほかの調度類も揃った雛飾りです。人形は福々として愛らしく、表情もあどけない子どもそのものです。木製の人形の表面に布を被せる「木目込み」の技法で作られています。

柳河春三は伊藤圭介の養子だったのか？

伊藤圭介と柳河春三

平成二十九年六月に開催した企画展「江戸の生きもの図鑑」では、名古屋を代表する本草学者の一人として伊藤圭介（一八〇三～一九〇一）を紹介した。名古屋の町医者之家に生まれ、長崎でシーボルトに学んだ圭介は、医学だけでなく西洋の植物学にも通じており、維新後には日本初の理学博士号を授与されている。

ところで、圭介の子息については、長男圭造、次男廉次郎、三男謙、四男恭四郎、五女小春、小春の夫で婿養子となった延吉らが知られているが、他に一時期養子が存在したという説がある。その養子とは、幕府の洋学研究教育機関である開成所頭取となった名古屋出身の洋学者、柳河春三（一八三三～七〇）である。

柳河春三といえば、卓越した語学力をもち、初期の翻訳新聞刊行を主導したこと、「新聞雑誌の創始者」とも称されている。明治三年（一八七〇）に三十九才の若さで亡くなったこともあり、知名度は必ずしも高くないが、幕末の洋学や初期新聞史を語る上では欠かせない人物である。その春三が名古屋で圭介の教えを受けたことはよく知られているが、養子説については真偽不明の一説として紹介されるところとどまってい

る。果たして春三は本当に圭介の養子になっていたのだろうか？

幼少期の春三に関する史料

幼少期の春三について、同時代の史料は断片的にしか残されていない。春三は天保三年（一八三二）二月二十五日、名古屋の町人の家に生まれ、幼少のころは栗木辰助を名乗っていたとされる。『金麟九十九之塵』（『名古屋叢書 第七巻』一四三頁）には、天保五年のこととして、御園片町の「書家」栗木辰助の名が記されている。それによれば、辰助は当時三歳にして「学ばずして能く書き、習わずして能く書を読む、奇異の童子」であったという。

次に春三の名前が確認できる史料は、天保十二年に伊藤圭介が刊行した『洋字篇』というアルファベット入門書である。この本の校訂者として、「西村良三」という名が記されている。時期は不明だが、春三が辰助から改名して西村良三を名乗っていたことは確かなので、これは春三とみなしてよいだろう。春三はこの頃すでに圭介の教えを受け、わずか十歳で洋学書の校訂に携わっていたのである。同時に、「西村」姓を名乗っている以上、この時点で圭介の養子になっ

ていないことも明らかである。以上はこれまで知られた比較的信頼できる史料によって確認できた、春三幼少期の事跡であ

る。これらの史料から、春三が圭介の養子であった事実は確認できない。

根拠薄弱な養子説

では、春三（良三）が圭介の養子になったことを記している最初の文献は何だろうか。それは明治十二年（一八七九）刊行の『明治十二傑』に収録された圭介の評伝（岸上操著）である。そこには次のような逸話が記されている。

「幼少の春三が御前で見事な書を認めたのを見て、藩主はこの神童を出家させれば、必ずや名僧になるに違いないと考え、出家するよう命じた。だが、本人はこれを嫌がった。両親は弟を出家させてごまかし、本人は伊藤圭介の養子にした。のちに故あって養子をやめたが、その後圭介のもとに寄寓した。」

現在のところ、これが養子説の唯一の典拠であり、以後に養子説を記した文献は、元をたどると尽くここに引き着く。だが、これはいかにもで・き・過・ぎ・た話という印象をぬぐえない。

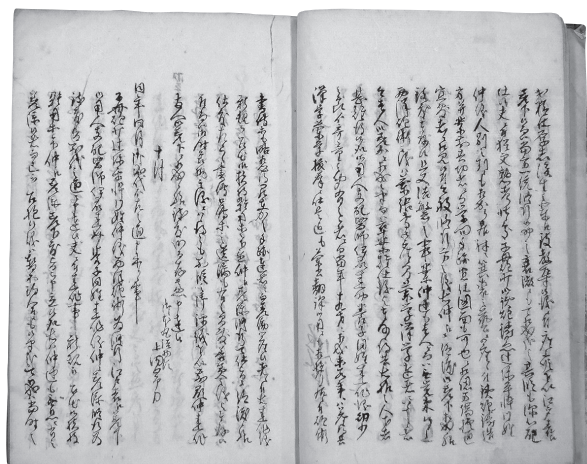
実はこれとほぼ同じ「御前揮毫」の逸話が、明治十四年の「柳河先生追遠会」において配られたと思われる、成島柳北著「柳河先生逸事」にも記されている。柳北は春三と親しかったので、この話を本人から聞いた可能性もある。だが肝心の養子説については全く触れていない。

結局のところ、養子説の根拠は後年の評伝で

ある『明治十二傑』しか存在せず、これだけでは確かに「一説」に止めておくのが妥当だろう。

新たな史料による検証

だがこのたび、こうした形勢を覆す興味深い史料を見いだすことができた。それは名古屋市鶴舞中央図書館が所蔵する「諸願達留・御触書込」(写真)という史料である(同館が開設したウェブサイト「なごやコレクション」にて画像が公開されている)。この史料は、尾張藩の砲術家である辻弥平が、上役に提出した願書や、上役から出された達・触などを書き留めた記録であり、信頼性の高い同時代の史料といえる。その



諸願達留・御触書込
名古屋市鶴舞中央図書館蔵

なかに、圭介の養子として「圭作」という人物が登場するのである。

圭作の名前が現れるのは、嘉永三年(一八五〇)十月、尾張藩士の上田帯刀(仲敏)が城代に提出した上申書の文中である。上田は名古屋随一の西洋砲術家であり、尾張藩に西洋流砲術を導入するため、江戸に辻弥平の息子仲を派遣し、かの佐久間象山のもとで学ばせようと考え、城代にその旨を進言したのである。その際、上田が辻仲の付添人として推薦したのが、圭介の養子「圭作」であった。その理由を、上田は次のように記している。

御用人支配医師伊藤圭助養子同姓圭作儀、幼少之節奇童之聞有之候者ニ而、当年十九才ニ相成、未若年ニハ御座候得共、漢学・蘭学・拔群ニ仕、是迄も蘭書翻訳御用ニも相携居候付、砲術書伝等も略相心得罷在、加之手跡達者ニ而(後略、傍点筆者)

圭作は幼少の頃から「奇童」として知られ、まだ十九歳だが漢学・蘭学ともに拔群である。蘭書翻訳の御用に携わっており、砲術書の心得もある。のみならず書道も達者である……。

養子説の確定と残された謎

ここまで記せば、お分かりいただけたかと思

う。そう、この圭作のプロフィールは、ことごとく春三のそれと一致するのである。「奇童」と呼ばれたこと、能書家であること、翻訳御用を勤めたこと。そして天保三年生まれの春三は嘉永三年、数え年で十九歳になる。

さわめつけはその後、嘉永五年九月に上田が再度提出した上申書において、圭作が分家して(つまり養子をやめて)「良三」に改名した、と記していることである。ここまで来ればもはや、圭作＝柳河春三であると断定してもよいだろう。さらに興味深いことに、上田は良三(圭作)が「剃髪」したと記している。つまり、春三は圭介の養子をやめると同時に仏門に入ったと考えられるのである。その事情は不明だが、出家と言えば前述の逸話に通じる話であり、何らかの関連性をうかがわせる。

いずれにしても、春三が圭介の養子であったことは十分論証できたと考える。正確に言えば、西村良三は天保十二年以降に圭介の養子となつて「圭作」を名乗り、嘉永三年十月から五年九月の間に養子をやめて剃髪改名し、再び西村良三を名乗ったのである。とはいえ、まだ謎は残っている。「御前揮毫」は事実なのか、なぜ剃髪したのか、江戸遊学計画はどうなったのか、などなど。今後も新たな史料を探っていくたい。

金城温古録

名古屋城の故事来歴や諸施設の機能などを網羅的に記した、「名古屋城の百科事典」とも称すべき書物である。尾張藩士の奥村得義(徳義・一七九三～一八六二)とその養子・定(一八三六～一九一八)による編纂である。

名古屋築城以来ながく泰平の世が続く、名古屋城に関する情報は機密として秘匿されたまま、まとまった記録が残される機会ほとんどなかった。ところが、一八世紀末以降、日本近海に異国船が出没するようになると、重要な軍事拠点である名古屋城に関する正確な記録が求められるようになった。こうしたなかで、尾張藩は領内の軍備を見直す一環として、文政四年(一八二二)、掃除中間頭の奥村得義に「名古屋城古義」の編纂を命じたのである。

執筆に先立って、得義は調査のため膨大な資料を書写収集した。調査を終えて執筆に取り掛かったのは天保十三年(一八四二)、完成した原稿の校閲を儒学者の細野要斎に依頼したのが安政五年(一八五八)であった。校閲を終えた要斎は、これに『金城温古録』と命名した。こうして万延元年(一八六〇)、前半部分にあたる

四編三十一冊の清書本が完成し、得義はこれを藩に献上した。だがそのわずか二年後、後半部分の原稿を未完成のまま残し、得義は没してしまった。

得義の死後、養子の定が編纂の任務を引き継いだ。程なく明治維新によって編纂は中断した。だが定は完成をあきらめず、維新後の混乱が落ち着いた明治三十九年(一九〇二)、後半部分を完成させて尾張徳川家に献上した。

完成した『金城温古録』は全六十四巻六十六冊(蓬左文庫本)に及ぶ大著となり、現代に至るまで名古屋城について調べる際の基本文献として活用されている。

(学芸員 木村慎平)

※長く絶版となっており、また『名古屋叢書統編』所収の活字版「金城温古録」が、この度「デジタル版名古屋叢書VOL.1(CD)」として復刊されました(一枚二千円)。

お求めの方は、蓬左文庫までお問い合わせ下さい。



デジタル版『名古屋叢書』
vol.1 金城温古録

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます〉

交通案内

●公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス(メグル)】名古屋駅前11番のりば名古屋駅発着で平日30分～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行、

④「徳川園・徳川美術館・蓬左文庫」下車徒歩1分

【市バス】名古屋駅前10番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F 4番のりば基幹バス「三軒家」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【JR】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

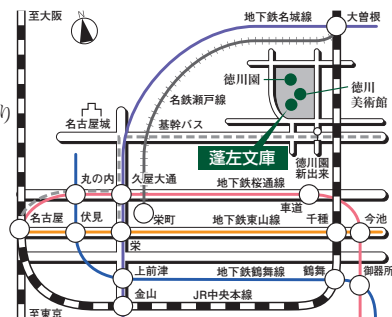
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車③番出口より徒歩15分 桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

●お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分120円)をご利用下さい。



ご利用案内

●休館日/月曜日(祝日・振替休日のときは直後の平日) ※催事により変更することがあります。

12月14日(木)～1月3日(水) 特別整理・年末年始休館

●展示室/有料 一般:1400円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

平成30年1月4日(木)～1月28日(日)の一般の入館料は1200円となります。

【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

●閲覧室/無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

